

すべては夢オチ

添牙いろは

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※現在、君の名は。二次創作のネタを募集中です。ある程度数が集まったら書き始めますので、妄想のタケをお題箱になげつけてみてください。

<https://odaibako.net/u/soekiba>

君と三葉さんが夢の中で逢いました。

なので、夢オチです。

3話目として、R-18版もあります。

目次

すべては夢オチ	1
やっぱり夢オチ	9
夢オチじゃない四葉	17
夢オチだから四葉は見たい	24

すべては夢オチ

「第一回、君と私の夢会議。パフパフドンドンドンパフパフ〜！ ……パフ」

「……ここは一体どこなんだ……？」

「というか、何なんだこのノリ。」

「……ああ、うん。自分でもこんな上手くいくとは思ってなかったからついテンションが上がっちゃって……」

「ということとは、これはお前の差し金か、三葉。」

「差し金、って失礼ね。これでも気を利かせてやったんだから」

「……ほう？ だったら話くらいは聞いてやろう。」

「ナニを偉そうに……ま、いいケド。えーと……最初に言つとくけど、コレ、夢だから」
「ああ、うん、それは何となく判る。いきなりこんな場所にパジャマで放り出されるなんて、どう考えてもおかしいからな。ここは、三葉が作った世界ってことか？」

「まあね。実際は、祈禱に使った祭壇がベースになつて——」

「繭五郎……だったか？」

「よく知ってるわね」

口噛み酒を供えに行ったからな……辛かったぞ、あの山道。

「そつかあ、ちようどあの日に入れ替わってたのね。……助かったわ」

テメエ……

「あつ、そうそう！ 私が作れたのは見えてる部分だけだから、山頂からは出ないでね。多分その先は断崖絶壁だろうし」

怖つ……で、何のためにこんなことを。

「あのねえ……入れ替わることでしか意思の疎通が取れないってのは不便でしょ？」

入れ替わり自体が不便で仕方がねエ。

「身も蓋もないことゆーな。それでも巫女の力使ってアレコレ頑張ったんだから」

その結果が、就寝中の対話か。そういうことなら、もうひと頑張りして、入れ替わり自体を止められなかったのかよ。

「……う、ま、まあ……そこまでは色々難しくくて……」

何とも中途半端だな……

「でも、こうして顔を合わせて話し合うのも悪くないでしょ？」

確かに、こういう場の方が決め事も捗るかもしれん。

「あ、でも夢だけに起きたら忘れちゃうから」

……ホント、意味ねエな……

「うるさい。ここで言いたいこと吐き出したら、目覚めもいいかもしれないでしょ」

でもさ、俺、結構言いたい放題書いちゃってるぞ。三葉は何か溜め込んでることあるのか？

「モチロン！ えーと……んー……ほら……瀧君、バイト入れすぎ！」

それは、お前が無駄遣いしすぎるから——つて、何度目だ、このやりとり。全然溜め込んでないぞ。

「だったら、そうね……テツシーとあんまり仲良くしないで！」

それも何度も聞いているっちゃー聞いているんだが……いい機会だし、普段話してなかったこと、訊いていいか？

「何？ あんま変なコトならスルーするけど」

てかさ、お前、テツシーとも友人なんだろう？ 何でそんなとこ気にすんだよ。

「だって……入れ替わりから戻ってくると、サヤちゃんションボリしてるもの」

あー……どうやらあのコはテツシーのことが気になってるみたいだしな。

でも、重要なのはお前たちの気持ちだろ。

「は？ それってどういう——」

ようするに、お前自身がテツシーのことをどう思ってるか、つてことだよ。

「そんなの、ただの友達に決まってるじゃない」

冷てエなあ。試しに付き合ってみてもいいんじゃないか？ 楽しくやっていけそうだし。

「サヤちゃんがいるのに、試しに……なんてできるワケないでしょ」

うーん、そうか？ アイツいいヤツだし、何だかんだでこれまで通り三人で仲良くつるんでいけると思うんだが。

「……ねえ、さつきから何で執拗に私とテツシーくつつけようとすんの？ もしかして、瀧君自身が惚れ込んだんじゃないかと？ ホモなの？ いま話題の腐女子なの？」

性別まで転換するな。

別に自分の趣味がどうこうではなく……俺なら、お前の力になれると思つてな。

「何の。意味わかんないんだけど」

つまりだ、俺ならお前に彼氏を作つてやれる、つてことだ。

「……バカじゃないの」

バカつてナンだ。実際、俺になった時のお前のモチっぷりは知ってるだろ。もし、テツシー以外に好きなヤツがいるなら、ソイツとくつつけてやつてもいいぞ。

「瀧君には無理よ」

何だよ、そんなに高望みしてんのか？

「自惚れるな」

どっちが。

「……ハア、もういい。夢だし。この際だから言わせてもらおうわ」

オウ、言つとけ言つとけ。

「私が好きなのは瀧君だから、テッシーとは付き合えないの。わかった？」

……？

……。

……！！?

「ナニその反応。ビツクリするわ」

驚いてんのはこっちだ。

「で、返事は？」

な……なんの……

「だから、私、瀧君のこと好き、つて告つただけど」

ほ……本気で？

「こんなトコでウソ言つてどーすんの。ま、起きたら忘れちゃうから、瀧君も正直に言つちやえば？」

軽いなあ……お前。

「……これでも内心、恥ずかしくて死にそうだったの。もし断られたら、起きたとき訳も

わからず泣いちゃうんだろうな、ってくらいには」

プレッシャー掛けんな！

「あ、だからといって、変に気を利かせて心にもないことで取り繕うのはやめてね。無駄に浮かれても、後で余計に沈むし」

……そ、その心配はねエよ。

「なら良かった。じゃあ、ちゃんと言葉で聞かせてくれる？」

も、もういいだろ。伝わったし。

「ダメ。私だつてちゃんと言ったんだから」

あー……まあ、俺も、その、ずっと、そうだったらいいなー、とか、頭の隅で密かに考えたり考えなかったり——

「回りくどい。男らしく結論から入りなさい」

チクシヨウ……なら、言つてやる！俺も三葉のことが好きだツ！

「あ……ああ……ウン、ありがと。その……ホントに言われると、どう返していいか、ちよつと困っちゃうね」

俺の勇気を返せ！

「や、や、や、いやいや、本気で嬉しいんやよ!? やけど、嬉しすぎて……この気持ち、どうしたらええの!?!」

と、言われても……

「じゃあ、瀧君はナニしたい？ あ、でも変なこと言い出さんでね。私いま、とんでもなく浮かれてるから……多分、シチャウと思う。アレでも」

ま、待て！ いきなりそんなこと——

「相変わらずヘタレやね。夢なんやから無理矢理押し倒しちやってもええのに」

そ、そんなことしたら、お前の目覚めが悪くなるだろ……

「ならんわよ」

……

「ほらー……瀧君がまごついてるから時間切れ。そろそろ朝よ」

お、俺の所為なのか……？

「そうよ。こういうのは男から迫るもんなの」

かもしれないけど……

「ということで、今夜はもうおしまい。次はちゃんと襲ってもらうつもりで、もう一度夢で逢えるように頑張ってみるから」

じゃあ、もしまた上手くいったら……

「その時は、女のコに恥かかせないでね。それじゃ」

けたたましい電子音が鳴り響き、俺は微睡みから叩き起こされた。

さすがにもう慣れたもので、この和室を見れば、ここが糸守だということはすぐにか
かる。

だが……

何だか今日は、目覚めがいい。

というか、むしろ落ち着かない。

妙に胸がざわつくというか……どうしたんだろうな、我ながら。

見慣れたはずの三葉の身体に、何故だか気分が高揚してくる。

もしかすると、変な夢でも見ていたのかもしれない。

三葉で変な夢……それはマズイな。いくら——だからといって。

無意識下なんて制御できるものでもないが……今後はなるべく、夢には出てこないで
欲しい。

妙な妄想を繰り広げていると、次こそはマズイことになりそうだから。

やっぱり夢オチ

あー……まー……いや、前回、強制パジャマ状態だったから、こうなりそうな気はしていたんだが……

「だったら言ってよ！」

言えるか！ 起きたら忘れちまうんだし。

「ともかく……うーん……やっぱり脱げないね、コレ」

眠った時点の服装がそのまま反映されて、固定されるみたいだな。

「仕方ないから、明日からは全裸で寝てね」

風邪引くわ！

「そのくらい気合で跳ね飛ばしなさい。私とやりたくないの？」

ナニ言ってるのお前!?

「だって……少なくとも夢の中では私たち恋人同士なんだし……」

ま……まあ……そうなんだよな……。この記憶を昼まで持ち越せたらいいのに。

「ホントに。覚えてないのに、気分だけザワついちゃって変な感じよ」

あんなに面倒だった入れ替わりが、何だか楽しみになってきてるもんな。三葉とやり

取りするには、それしかないから。

「うん。これが瀧君の文字だー、ってメモを見ただけで浮かれちゃったりしてるもん」
俺も……まあ……ウン。

「あと、オナニーも激しくなつたし」

そゆことゆーなって！

「何だよ。瀧君は私でオナニーしてないの？」

それはまあ……その……三葉のことが気になって……つい……

「でしょ？ 私だって、瀧君の身体が見たくて、やたらと全裸になったりしてるし」

……ちよつと待て。少し論点がズレてる気がするぞ。

「そう？」

相手を妄想して自分の身体でナニをしたか、って話じゃなかったか？ それだと、俺の身体にイタズラしているように聞こえるんだが……

「ナニ言ってるの。相手の身体にナニをしたかに決まってるじゃない」

オイ！ こっちには見るな触れるなと約束させておきながら！！

「え？ 守る気あつたの？」

信用ねえなあ……。だったら、最初からそんな約束させるなつての。

「約束はさせるわよ。女のコなんだから。でも、破ってるでしょ？」

破るような約束させて、何が楽しいんだよ。

「女のゴだから、って言ってるじゃない。で、守ってないのよね？」

お……俺がそんな男に見えるのか？

「見える。とゆーか、男がそんな約束守るなんて端から思っていない」

………

「これは、瀧君が——なんて言うつもりはないの。男のゴが女のゴの身体になって、何もしないなんてあり得ないから。常識的に考えて」

手厳しいな……

「もし私に何もしてなかったら、涸れてるかホモかどっちかね」

自分の彼氏にもっと自信持てよ！

「冗談よ。本気で心配してるわけじゃないって。だから重要なのは、ナニをしたかであつて……まさか、自撮りなんてしてないでしょうね？」

するかよ!? 流出したらヤバイだろ。

「懸命な判断に感謝するわ。あと……指入れは？ 傷とかできたら怖いんだけど」

してねーって！ 何なら起きてから自分で確かめてみる！

「嫌よ。何で自分のそんなとこ覗かなきゃなんないの」

………

「ま、何かあってもガツカリするのは瀧君だから構わないけど?」

三葉だつて嫌じゃないか? 知らないうちになくなつてるのは。

「まー……自分の指で済ませちゃいましたー、つてのはちよつと味気ないかもね。でも初めては痛いつて聞くし……あ」

オイ、もしかして……その痛みを俺が変わつといてくれれば……なんて考えてないだろーな?

「えっ!? うん……まあ……」

ちよつと味気ない、はどうした。

「軽く言わないでよね。男子のオナニーは楽だからつて」

それは認める。女子と比べれば。

「というか、男つてイクの早すぎない? 自分で試してみてもビックリしたわ。野生動物なの?」

むしろ、女のが時間かかりすぎなんだよ。しかも、力入れると痛くなるし。

「女のコはデリケートだからね」

ホント難しいよな。多分、女が一回イク間に、男なら三回はイける。

「だからつて、一緒の時は自分だけ先にイツたらたらダメだからね。私がイクまで我慢すること」

そうは言うけど、そもそもナカイキできるのか？

「知らないわよ。入れたことすらないんだから」

まあ、それもそうか。

「とはいえ、少なくともソコではイケるワケだから……イキそうになったら腰を止めて、クリクリ〜って頑張ってくれればいいから」

オ…………オウ…………

「…………さすが、私の身体を隈なく観察しているだけはあるわね。女のコの秘密の場所なんだから、もう少し無知を装ってくれても良かったんだけど」

ス…………スマン…………

「まあ、気持ちにはわかるけど。私も瀧君シコシコしながら、こんなに入れるの？　ってドーン引きしたものだ」

イクのかヒクのかどっちかにしてくれ。

「ヒキながらイケるのよ。男は年中発情中でいつでも準備オツケー、みたいなもんなんだから」

ヒデエな。そこまでサカってないだろ。

「ううんっ、サカッてる！　というか、何で毎朝立ってんの。瀧君寝る前に抜いてる？

…………私で」

最後の付け足しはナンだ。

「あーっ！ 他の女で抜いてたの!? 浮気よ浮気！」

無茶言うなっ！ つっつか、最近はお前以外で抜いてねーっての！

「正直で宜しい」

まったく、ナニ言わせんだよ……

「勿論、私も瀧君に抱かれる妄想しかしてないからね、每晚」

よく飽きないよな、お互い。

「同棲するようになったらどうなっちゃうのかしらねえ……」

とはいえ、快眠には困らないだろうな。イッた後はよく眠れるし。

「だからこそ、一緒にイケた方が、一緒に眠れていいでしょ？」

な、なあ……そこまで言うのなら、いつその事、実際に逢ってみたくならないか……

？

「瀧君とは逢いたい。でも、エッチは夢の中でしたい」

そ、そうなのか……

「だって、夢の中なら諸々の心配もいらないでしょ？ 安心して楽しめるもの」

確かに……そう言われると……

「だから、ちゃんど寝る前には裸になっというね！ 私、楽しみにしてるから♪」

……この目覚めだけで何となく判ってしまう。今日は、三葉と入れ替わっているんだらうな、と。

どうやら俺は……彼女のことを好きになっちゃったようだ。三葉の身体の中に入っている、と自覚しただけで、胸の動悸が収まらない。よくも、こんな精神状態で眠れたものである。

ただ……モヤモヤした想いをしていたのは俺だけではなかったようだ。これまでの取り決めが一つ緩和されたのは、その証左に違いない。

“お風呂とか入ってもいい。止めても無駄だろうから”

三葉のノートに、三葉の文字で書かれているのだから、そのとおりに受け取って良いのだらう。

止めても無駄——というのは少し癪だが、これで言い訳が立つこともある。

仮に裸で眠っていたとしても、それは風呂上がりだったから、と。

実際のところは、

彼女の裸を眺めながら、

彼女の身体をまさぐく弄って、

その果てに、睡魔に負けてしまったとしても。

勝手に妙なことをしてしまつて、三葉に悪い……とは思わない。きつと、あつちも同じようなことをしているだろうから。

しているからこそ、このようなことを言い出したのだろうから。

ならば、今夜は楽しませてもらおう。

そしてそのまま眠りに落ちたなら——

夢の中でも三葉と逢えるかもしれない。

夢オチじゃない四葉

「おはよー、瀧君っ！」

おはよう……って、アレ、四葉？ いや、だが、俺の身体は……待て、これは……ど

ういう……!?

「うわあ……まさかとは思ったけど……ホントにお姉ちゃんの彼氏なん？」

いつ、いやいや、そんなはずないでしょ？ まったく四葉ったら寝ぼけてるのかしら

？ おほほほ……

「お姉ちゃんはそんな笑い方せんて……」

だな……。どうして判った？ というか、何で名前まで知ってるんだよ。

「何でって……お姉ちゃんが夢の中でそう呼んでたから」

夢？ それってどういうことだ？

「ふうん、この期に及んで白を切るんだ。そんなら、お姉ちゃんにバラしていい？ こな

いだトイレで……」

わっ、わっ、わかった！ 知ってることは全部正直に話すから！

「……ホントにお姉ちゃんやなくて瀧君って人なんね。自分のこと自分にバラすとか、

ありえんもん」

……ということ、原因はわからないが、俺と三葉は時々身体が入れ替わってららしいんだ。

「ふうん……ホントにそれだけ？」

他に何を隠してると言うんだよ。

「やから、夢のこと」

本当にそれは何も知らないんだよ。むしろ、こつちが教えて欲しいくらいで。

「あ、そ。なら教えたいけど、瀧君とお姉ちゃん、夢の中でセックスしてた」

……な……っ

「やから、セックスしとったで」

にっ、二度言わなくていい！ その……女のゴが！

「ビュービュー♪ セックスセックス♪」

……さすがにそこまで言われたら……な？

「つまらんの。んで、とにかくセックスしとったん」

な……何を根拠に……

「夢に根拠もナニも。でもさ、こちとら何度も同じ夢見るんやもん。勘弁してほしいわ」

それってつまり、四葉の夢の中で、俺と三葉がその……してる、ってことじゃないのか？

「ちよつと待って」

あ、いや……すまんかった。

「もしセックスのこと気にしてるんなら違うから」

ソレ言われるのもさすがに慣れてきたけど……じゃあ何だよ。

「瀧君は瀧君であって、私のお姉ちゃんやないんよね。知らん男の人からいきなり呼び捨てってのも……」

そう言われればそうなんだが、入れ替わっていた都合上、最初から四葉のことは呼び捨てなんだよ。

「瀧君の都合はわかる。でも、都合つてのは時間と共に変わっていくもんだから。瀧君とお姉ちゃんの関係みたく」

妙な言い方すんなよ……。じゃあ、四葉ちゃん、って呼べばいいか？

「……ま、それでええわ。ともかく、私が、瀧君とお姉ちゃんやんがセックスしてる夢を見てる、って言いたいんやろうけど、多分、それ、違う」

随分強気で言い切るな。何でだ？

「やって、私が瀧君の名前知つとるわけないやろ」

……三葉が三葉の時に、ポロっとやらかした、とか？

「聞いたらんで。とにかく、私は夢の中でしか瀧君の名前は知らん」

……で、だから、何なんだよ……

「何なんだよ、やないでしょ！」

と言われても……俺たちだって好きで入れ替わってるわけじゃないし、他の人にこのこと話して、信じてもらええると思うか？

「まあ、それは、そうなんやけど……」

むしろ四葉ちゃんの方が、理解者として俺たちに協力して欲しいくらいなんだが。

「ふっふっ♪ そりやそうよねえ……」

何だよ、変に乗り気じゃねーか。

「だったらさあ……ちよっつと私のお願ひ聞いてくれんかなあ？」

断る。何かもう、嫌な予感しかしないから。

「あつ！ そゆことゆってええと思ってる？ 何ならトイレでやらかしたこと……」

わっ、わっ！ わかつ……だから……本当にそれだけは勘弁してくれ……

「やけど、何でトイレで突っ立ったままお漏らししとったかわかったわ。瀧君、男の時のクセで、立ちションしよとしたでしょ」

……あの時はたまたまズボンだったし、急いでたし。取り出そうとしてなかった時は

心底焦ったぞ。

「やれやれ。お姉ちゃんに恥かかさんためにも、その身体にも慣れといた方がええよ」
もちろん気をつけるが……で、俺に何をさせようってんだよ。あんまり変なことさせると、三葉にバレるぞ。

「うん、それは私も恥ずかしいから……」

おい……まさか……

「ん。私、瀧君をね……」

ま……待て……それは、さすがに……！

「——お兄ちゃんって呼びたいの！」

……はあ？

「何よっ！ トイレでお漏らししてたのお姉ちゃんにバラしてええん！」

いやいやいやいや！ そーじゃなくて、ちよつと拍子抜けだったから驚いただけだ！

「拍子抜けって……ああ……期待させちゃつてすまんかったなあ。まさか、お兄ちゃん女子小学生とセックスしたいと思うとは。守備範囲広すぎない？」

ちっ、違うっての！

「何が違うって？ じゃあ何と勘違いしてたん？ ゆつてごらん？ んん〜？」

例えば、その……キス、とか？

「ぷっ、ぷははははっ！ 何ゆってんのお兄ちゃん！ そんなんするわけ——」

悪かったな。アホなこと言つて。

「……………ふむ、そういえば……………」

何だよ唐突に。

「コレ、マジで訊くんやけど……………夢のこと、ホンットーに、覚えとらんのかな？」

あ、ああ……………マジだぜ……………。だからこそ、四葉ちゃんに教えてもらいたいくらいで

……………

「？」

何だよ。

「ま、ええわ。やったらお願いは夢の中でしーとこーつと♪」

ちよっ……………お願いって……………それならもう……………！

「起きてひとつに寝てひとつ、つてことで」

ことわざっぽくゆってるけど、そんな格言ないからな。

「そもそも、夢やったら何でもやり放題っしょ？ 但し……………こつちは夢のこと覚えとる

からね。あんま酷いことしたり、そもそも言うこと聞いてくれんかったら……………」

う……………わかったよ……………でも、本当にあんまり変なことさせるなよ？

「変なことではなければ今頼んどるわ！」

何させる気だよ！

「ま、それは寝てのお楽しみ、つてことで。少なくとも、ここではできないことをお願いするつもりよん♪」

夢オチだから四葉は見たい

「ねえ……瀧君、今日はちよつと、大人しくない?」

そんなことないと思うけど……どうして?

「だって、ここは私たち二人だけの世界なんだよ? せつかくお互い裸なんだし、もつとワ—つとはつちやけても!」

充分すぎるほどはつちやけてるだろ……

「ほら—、やつぱり元気ない! もしかして、起きてるときに気になることでもあった?」

特にないぞ。至って平凡だ。

「起きたら忘れるとはいえ、ここで吐き出しておいても……アレ? 何の音? コレつて、え、え——」

ああ……三葉、スマン。いつもは俺の方が先に起きてるから知らなかったけど……目が覚めた方は、こうやって消えていくんだな。

さて……どこに隠れてるんだ、四葉のヤツ。

「ウンウン、ちゃんと私の指示通りにやってくれたみたいね—」

うをつ、いつからそんな近くに!? てか、そんな小岩覗けばバレバレなのに、何で気づかなかつたんだ、俺たち……

「私の方が寝るの早いから、いつもお姉ちゃんたちを待ち構えてたんよ。それに、そこ芝生がふかふかで横になりやすいからって毎回同じところでシすぎ」

と、いうことは……

「お姉ちゃんか喘いでるところも、瀧君が腰振つてるところもずっと全部丸見えやつた、つてことー」

うっ、うわああああ!! 次から場所変えるしかねえええええ!!!

「どうやってお姉ちゃんに提案すんのよ。いまさら手遅れやから、これからも私の前でパコパコしてなさい」

さすがに……知ってしまったら無理だろ……

「ホントもー手遅れだつてのに……。それよりもさ、いま夢の外は朝六時なんでしょ?」

あ、ああ……休みも構わずその時間に目覚ましをセットし続けたからな……いつ入れ替わりが起きてもいいように。お陰で毎日寝不足気味だ。

「やったら瀧君も早く寝て、私に先と……あ、やっぱええわ。その最中にお姉ちゃんと出くわしても嫌やし」

三葉に見られて嫌なことするつもりなのかよ！

「そりゃそうよ。てかぶつちやけ、瀧君やって起きた後まで記憶残してるよーならこんなことせんし」

う……う……で、俺をどうしようっていうんだ……う？

「えーとね、まー、単刀直入にゆって、チンチン見たい」

それならもう見てるだろ。

「やなくてね、ほら、今は下向きでしょ？」

そーだな。

「で、お姉ちゃんと抱き合ってる間は、上向きやったやん」

そゆことゆーなよ！

「つて思い出しただけで上向いてくるの？ がんばれ？ がんばれ？」

と言われても……さすがにマジマジと観察されたら緊張するし。

「あ、また下がつちやった。そうやって変身するところが見たかったのに」

変身して……つまり、勃起させて欲しい、と？

「人体の神秘、って感じやん♪ で、どうすれば立つん？」

刺激があれば反応はすると思うが……

「つまり、蹴飛ばせて？」

そんな乱暴なことすんなよ！ もっとこ……優しく、だな？

「うーわ、小学生相手にナニ考えてんの。ドン引き……」

自分でやるわ！ 誰も四葉ちゃんにシてくれなんて言つてねーだろ。

「どちらにせよ、触るのはナシね。チンチンの力だけで変わつてく様子が見たいんやから」

さすがに人前だし、この状況じゃ無理だな……

「ねえ、エロいことせんと立たんの？」

何のために立たせるのか、知っているのならそこから察してくれ。

「うーわ、下衆っ！ 男子つてやつぱ下衆いわー」

生理現象だから仕方ないだろ。というか、むしろ他にどうやったら立つと思つたんだ？

「えっ!? いや、ほら、その……女のコのことを好きー、つて感動したら？」

女のコのこと好きだと思つたら、やつぱそつちに頭が傾くしなあ。

「……やつぱ、男子つて下衆い」

ホント勘弁してくれ……

「まあええわ。自分の義兄になるかもしれない人が特別下衆いなんて思いたくもないし」

逆に、エロくなくて立ちそうなことって何だよ。

「例えば……うーん……ハグとかキスとか？」

その辺はエロくないのか？

「やって、映画のラストを締めるシーンやよ？ それを変な目で見るとか……うわー

……瀧君サイアクー」

あーあー、わかったわかった。エロくないエロくない。じゃあ、四葉ちゃんのこと抱きしめればいいのか？

「軽くゆってくれるね。つつーか、くつついたらチンチン見えない」

ってことは……キスの方が。

「まあ、そうなるね」

いいのか？ 俺となんかで。

「瀧君やって、なんやかんやでチューしたそうやったやん？」

そんなことあるワケないだろ。むしろ、こないだの話から引っ張るってことは、四葉ちゃんの方が……

「バ……バカなこと言わんで！ お漏らしのこと、お姉ちゃんにバラすよ!？」

わっ、悪かったから、それは勘弁してくれ！

「……ああ、いや、ゴメン。私も熱くなりすぎたわ」

こつちこそ……ウン。

「だいいち、夢でゆつたこと、瀧君は起きたら忘れるんやもんね」

まあ、そーだな。

「そんなら、ゆつちやうか」

何を。

「私、瀧君とキスしてみたい」

……はつきり来たな。

「それも、舌と舌でグニグニするヤツ」

お……俺と、か……？

「……ウン。あ、でも、好きとかそんなやないよ!? お姉ちゃんと瀧君取り合うつもり

もないし」

なら、何で……

「それは……わからん！」

と、胸を張って言われても……

「ただ……あーもー、どーせやから全部言っちゃうか！」

ゆつとけゆつとけ、俺の方は起きたら忘れるし。

「木陰でチラチラ覗きながら……カッコイイ彼氏やな、って思ってたんよ、ずっと」

そ、そういうことを面と向かって言われると、流石に照れるな。

「私かて恥ずかしいわ」

……………。

「でも、ゆっちゃん。せやから、オトナのチューとかしても、別段気持ち悪くはないよ。むしろ、瀧君やから大丈夫、というか」

それでも、好きってことはないんだよね……………？

「正直、そういう感覚がよくわからんのよ。ただ、こうやって裸のトコをペタペタ触ってみたい気はするかな。これって、性欲ってヤツ？ あ、でもさすがにチンチンは無理」

むしろそこは触らずにいてやってくれ……………

「と、いうことで……………チューしながらチンチン観察させてもらうから、瀧君は膝立ちになつてくれる？」

こ、こ、こ、こ、こ……………？

「そんで、目は閉じといてね。私は開けたるけど」

お、おう……………

「じゃ、いくで」

……………

「ん、ん……………ん、んふう……………」

ンっ、ン、ン……

「むふ……ふ……ん、ん……ん♪」

つぶは。もう充分だろ!?

「あ、立つのは見なくても判るんだ」

自分の身体のことだからな……で、これで満足か？

「……うん？」

お、おい……まだ何かありそうな顔しやがって……

「あるっちゃーあるけど……えいつ♪」

おいっ、膝が……イテ……ってコラ!

「ゴメン。関節キメるつもりはなかったんやけど」

で……俺を押し倒してどーするつもりだ？

「別に。ただ、こーしてくつついてみたい、ってだけ」

……そーか。ただ、それ以上のことは考えんなよ。

「それ以上のことってナニ？ もー、瀧君てばえっちー？」

何なら、試してみるか？

「うわ、瀧君てば小学生相手にヤバイヤバイ。でも、今の私なら本当に……って、アレ？」
フ、夢の中は寝ている間の姿に固定されるんだ。脱ごうにも脱げまい。

「つてことは、お姉ちゃん……昨日の夜から素っ裸で寝てた、つてこと……？」
まあ、そうなるな。

「うーん……さすがに私には裸で寝る勇氣はないかも……風邪引きそうやし」ということで、このくらいで満足しておけつてことだ。

「ま、ええで。その代わり……さっきのキス、もう一度シてくれる？」

それはいいけど……うーん……そう何度も求められると、子供相手とはいえ、あまり健全ではない気がしてくるな……

ん、ああ……この天井は……糸守か。どうやらまた入れ替わってしまったらしい。そういや四葉のヤツ、今度夢の中でナニかやらかす、つて言つてたけど……俺は一体ナニをされたんだ？ まあ、夢の中ならどーともなるんだらうけど。

「お、おはよう……瀧君」

ふすまを開けるなり、いきなり断定か。もし違つてたらどうするつもりだよ。

「それは……大丈夫。さつきまで、夢で瀧君と逢つてたから」

で……そこで俺とナニをシてたんだ？

「いつ、言えるわけないやろ!? やからこそ、夢の中でお願いしたんやから!」

そ、そうか……なら、俺も訊かないようにしておこう……つてどうした？ そんなに

ベタベタと。三葉の身体で何か気になることがあるのか？

「うんにや。中身は瀧君やってわかつとるけど……身体はお姉ちゃんなんやね」

まー……そうだな。

「……つまらんっ！」

まあ、面白いもんでもないだろ。

「やっぱ、瀧君の身体に入った瀧君でないとつまらんわ！　ということ……もう少し早起きは続けてくれる？」

マジでか……。てか、不用意に早く起こすと、三葉からもクレーム来そうなんだが。

「お願い！　もう一回だけ試したいことがあるんよー！」

ったく……それを済ませたら、また起床時刻は元に戻すからな。

「んふ、ありがと♪　あ、それと……」

なんだ？

「コレ、本気でお願ひするんだけど……私が寝てるときは、無理矢理起こしたりしないでね。勝手に布団を剥がすとかマジ厳禁」

？　まあ、いいけど。起こす機会なんてそうそうあるとも思えないし。